みんなで語ろう民放史

題字　中川　順

「カメジロー」に込めたもの

佐古忠彦（TBSテレビ報道局）
『ＪＮＮドキュメンタリー　ザ･フォーカス』
プロデューサー

いつものように、深夜というか未明の放送を終えた月曜日の朝、出社すると思いもよらぬ数の視聴者からのメールが番組宛に届いていた。

「こんな人物がいたのか！」

「いまも沖縄の人々が声を上げている理由がわかった」

「夜中にこそこそしないで、もっといい時間に放送しろ」

別にこそこそしているわけではないけれど、ドキュメンタリー番組は、たいていそういう深い時間に生きている。でも、どれもこれも嬉しい反応ばかりだった。その後も毎日のように視聴者からの感想が届いた。

放送したのは、取材開始から一年かけて制作した『報道の魂ＳＰ米軍が最も恐れた男～あなたはカメジローを知っていますか？～』

戦後の沖縄で占領米軍の圧政に敢然と立ち向かい、弾圧を受けながらも、祖国復帰に向けて民衆をリードした、政治家・瀬長亀次郎を描いたドキュメンタリーだ。

私にとって沖縄は、取材者として最も多く通っている現場である。10年間番組をともにした、ジャーナリスト・筑紫哲也さんがよく言っていた「沖縄に行けばこの国が見える。沖縄には日本の矛盾が詰まっているんだ」という言葉に衝き動かされてきたような気がしている。そして、沖縄という現場で見てきたのは、戦後日本の「矛盾」の多くを背負う姿だった。

しかし、その沖縄は、特に最近、一面的な部分だけを見た、あるいは誤解に基いた、無理解のままの本土からの批判の声にさらされている。中には沖縄へイトといわれるものもある。この構図は、例えば温度差、溝、という言葉で表現されてきたが、なぜ、こういう状態が長く続いているのか、考えた。そして達したある結論―。

それは、本土の人々から「戦後史」の認識がすっぽり抜け落ちているのではないかということだった。であるならば、その戦後史の主人公である、瀬長亀次郎を通して歴史を見れば、今がある理由が見えてくる。そして、これまでの理解とは違った沖縄の姿が見えるのではないか、問題の核心に近づけるのではないかと考えた。

その意味で、普段からすると驚くほどの深夜の番組への反響に、

伝えたいことが伝わったのではないか、と感じていた。ならば、もっと広い範囲で、多くの人に伝えたい―そう考えたのが、映画化への一歩だった。もちろん、見ている人の数は、テレビのほうが圧倒的に多いが、ただ、わざわざお金を払って映画館へ足を運んでいただける人に届けることで、何か違う広がりかたもあるのではないか、そんな思いがしていた。

「カメジロー」とは

演説会を開けば、毎回何万もの人を集め熱狂させた男。

それが瀬長亀次郎である。いまもなお、沖縄が声を上げ続ける、その原点といえる人物だ。

現代に広がる県民大会や基地問題をめぐり知事が国に訴えられた裁判の開廷前の集会の光景は、沖縄を置いてこの国のどこにもみられないものだ。その原点はどこにあるのか。歴史をたどると亀次郎の時代に行き着いた。

占領米軍の弾圧を恐れ、自由にものをいうことがはばかられた戦後、人々は、きょうは亀次郎の演説会があると聞けば、家族そろって早めに夕食を終えて会場に向かったという。ある年代以上の方に話を聞けば、同じ証言が返ってくる。発言はしなくとも、その場所は、意思表示の場でもあった。言いたいけど言えないことを言ってくれる。演説の後、聴衆はすっきりして笑顔で帰ったという。暗黒時代といわれた占領下、亀次郎は民衆にとって思いを託せる希望の光だった。そこに赴くこと自体が意思表示で、思いを託す場―それは、まさに現代の県民大会の光景と重なる。いまも60年前と同じことをしなければならない状況が続いていることの表れでもある。そんな過去と今をつなぎたかった。歴史上の一つ一つの点を結ぶと、一本の線となって、亀次郎時代が現代につながってくる。

沖縄の近現代史、精神史を研究する琉球大学の比屋根照夫名誉教授は、取材にこう述べた。

「沖縄の民主運動は、谷間の時代もあるが、一貫して流れているのは、アメリカ占領時代の不法や不義に対する抵抗の精神。それが、いまの日本政府の沖縄基地政策、構造的差別への抵抗に結びついている。思想の流れは、その時代の血脈や底流になって流れていく。沖縄は常に過酷な現実を目の前にしているから、その血脈や底流が途絶えることはない。戦後沖縄の抵抗運動は、継続している」

その先頭にいたのが瀬長亀次郎なのである。

《民主主義》を勝ち取る闘い

亀次郎の抵抗の象徴的なものが、占領軍ににらまれるきっかけになった1952年4月の琉球政府創立式典での出来事だ。

琉球政府は、自治の形をとっているが、実際は、民政府と名前を変えた米軍の指揮下にあった。創立式典では、直前の選挙に当選した立法院（現在でいえば県議会）議員たちが、米軍にいわば忠誠を誓う宣誓が行われた。ひとりひとり名前を呼ばれ、起立し直立不動で宣誓する。しかし、ただ一人立ち上がらない人物がいた。その人こそ、瀬長亀次郎であった。

最後列でただ一人、名前を呼ばれても座っていた。

亀次郎は言う。

「我々は選挙されたんだから、アメリカにではなく沖縄県民に誓います、というのは当然のこと。米国民政府に忠誠を誓うために選挙されたんじゃない。アメリカの星条旗の前で宣誓させるとはどういうことだ」

亀次郎にしてみれば、この行動には根拠があった。「占領された市民は、占領軍に忠誠を誓うことを強制されない」というハーグ陸戦条約がそれだった。抵抗するにも、常に法律的な裏づけを意識していたのが亀次郎だった。

それ以来、亀次郎は、アメリカにとって占領政策を脅かす存在になっていく。

労働者の権利を保証することに奔走し、土地を守ることを訴え続け、そして祖国復帰を叫ぶ。アメリカにとってこの上ない、邪魔な人物となった。

冷戦構造が深刻化したことで、太平洋の要衝として沖縄に恒久的な基地を建設したいアメリカは、ついに亀次郎を逮捕し投獄。容疑は、沖縄からの退去命令が出ている人物をかくまったとするものだ。亀次郎が中心となって設立された沖縄人民党の党員もいっせいに検挙されたことから「人民党事件」といわれたが、当の〝主犯〟より罪が重かったことからも、この事件が誰を標的にしたものなのかは明白だった。

収監から1年半で出獄した亀次郎の目に飛び込んできたのは、その日を待ちわびた民衆が歓迎する姿だった。

ここから第二の米軍との闘いが始まった。亀次郎が那覇市長選挙に当選すると、米軍の弾圧は市民を巻き込んで強まっていく。米軍は、那覇市への水道供給を止め、那覇市の預金も封鎖し、補助金の支払いも止めた。財政難に陥るところだが、市民は亀次郎を助けろと、市役所に納税のための長蛇の列を作った。

米軍に操られた反亀次郎派の市議によって市長不信任案が可決されると、亀次郎は市議会を解散。市議選で亀次郎派が躍進し、簡単に不信任できないようになると、米軍は布令を改定、強権的に亀次郎を市長の座から追放した。それでも、亀次郎は、後継候補を勝利に導く。市民は、選挙でことごとく意志を示し、米軍は占領政策を転換せざるを得ないところに追い込まれる。すべては、亀次郎と民衆の闘いが生んだものだった。

その闘いのキーワードは《民主主義》だ。世界最大の民主主義国家であるアメリカが、それとは対極にある手法で弾圧を繰り返したが、そこに迫っていった亀次郎と民衆は《民主主義》を武器にしていた。そこから連なる歴史は、まさに《民主主義》を勝ち取っていく姿である。

戦後、民主主義を与えられた本土の一方で、それはこの長い時間の中で血肉化された、ある意味で沖縄のアイデンティティーといってもいいのではないだろうか。

亀次郎の〝魂の言葉〟

報道ドキュメンタリー番組の映画化。これまで民放各局で話題になった作品も多かったが、TBSでは初めてのことだ。正直言って、これまでも他局の事例を、どうしたらああいうことができるのだろうか、と私自身、指をくわえてみているほうだった。そして、ようやくその機会が訪れたような気が

していた。

今回は企画書を当該部署である映画・アニメ事業部に持ち込んだ。人気俳優が演じてヒット作を繰り出す部署に、この地味な報道ドキュメンタリーがどう受取られるのか…しかし、そんな不安は一気に吹き飛ぶことになる。

「よし、やろう！」

一ヵ月後にはゴーサインが出ていた。年末年始の五日間の休みを映画化構想にじっくり当て準備を進めながら、昨年2月、3月の追加撮影になだれ込んだ。当時、月曜から土曜までキャスターとして生放送を抱えていたため、毎週末を使いながらの取材となった。

タイトルは、『米軍(アメリカ)が最も恐れた男　その名は、カメジロー』に決めた。テレビの作品よりも押し出しを強くするイメージだった。

映画化にあたっては、エピソードを増やし、それに伴い新たな証言者にも登場いただいた。それぞれに貴重な証言をいただいたが、中でも特に二人の存在が忘れられない。

一人は、上原徹さん。沖縄戦で少年警察官として、当時の島田叡(あきら)知事の身辺警護に当たっていた。その上原さんは、戦後再び警察官になった。与えられた任務は、米民政府に批判的な人々を監視することだった。

亀次郎が中心人物だった沖縄人民党の演説会に紛れ込み、演説内容などをメモにして報告をあげていた。「恐ろしい共産主義者」というイメージを植え付けられていたが、収監されていた亀次郎の護送に付き添ったとき、それとは全くかけ離れたものを感じていた。

いつのまにか、警察官としての立場と沖縄の人間としての気持ちのはざまで揺れ動くようになっていた。その心を決定的にした瞬間が訪れる。亀次郎が出獄して三カ月後に行われた、土地を守る「四原則貫徹住民大会」でのことだ。

一方的に基地建設のために、銃剣とブルドーザーで住民の土地を奪っていく米軍への沖縄の怒りは頂点に達していた。「一坪たりとも渡さない」これが合言葉だった。警察官の上原さんでさえ、この大会で「燃えていた」という。そして、目の前に現れたのが亀次郎だった。

「亀次郎さんは、こう言ってましたよ。一人では届かないけれど、10人集まり、100人集まり、何万人となれば、アメリカに声は届くんだぞって」。これは、伝説となっている演説の再現だった。

戦後五年が経った1950年、亀次郎はこんな演説をしていた。

「この瀬長ひとりが叫んだならば、50メートル先まで聞こえます。ここに集まった人々が声をそろえて叫んだならば、全那覇市民まで聞こえます。沖縄70万人民が声をそろえて叫んだならば、太平洋の荒波を越えワシントン政府を動かすことが出来ます」

亀次郎は団結することの重要さを訴えていた。そして、その魂の言葉は、人々の心をわしづかみにした。上原さんの心も、沖縄の人間として亀次郎の言葉にどんどん引き寄せられていった。

「沖縄を守らなければならない。土地を売ったら、もうだめだよ、と。軍用地を売ることは、沖縄をアメリカに売ることと同じなんです。そうなると、沖縄はアメリカに支配されることになってしまう」

「みんな一つになってアメリカに届けという気持ちでした」

権力側にいた上原さんも、実は地主の一人だった。アメリカに土地を奪われたままの現実に亀次郎の言葉が、沖縄の人間としての心を思い起こさせた。

上原さんは、立場を越えて亀次郎に影響を受けた象徴的な人だった。沖縄刑務所と那覇警察署の間の護送に何度か付き添ったことがある、と聞いて、上原さんに話を伺っていたが、当初は、権力側にいた人間として、なんとなく口が重たい印象を受けていた。しかし、話が土地闘争に広がっていくとどんどん変わっていった。取材場所の刑務所跡地の公園から程近いところに、住民大会が行なわれた那覇高校があるが、そこに移動すると、一気に上原さんの記憶は蘇っ

ていった。そこにあったのは、記憶と向かい合いながら、思いを新たにしているかのような上原さんだった。

そして、もう一人が、アメリカ・フィラデルフィアの郊外に住むハワード・マックエルロイさんだ。亀次郎の那覇市長時代に海兵隊員として沖縄に駐留し、その後、民政府の一員として返還交渉にも携わった人物だ。テレビの作品から映画に発展させていく中で、大きな課題が、アメリカが亀次郎の何に恐れたのか、そのことをどう、より掘り下げて伝えるかだった。そのために、どうしてもアメリカ側の証言がほしかった。ただ、戦後といっても日本の敗戦から遠くない時期だけに、高齢化が進む中で、証言者を見つけるのは難しいという見方がアメリカから伝わっていた。が、しかし、それは突然の連絡だった。映画の制作日程を考えても、ギリギリのタイミングでたどり着いた証言者だった。

マックエルロイさんからみても、亀次郎は、

「生き生きとした歯切れのいい言葉で基地に反対していた」という。そして、「愛国者で沖縄の未来のことだけを考えていた」人物だった。

アメリカは、その影響力を極端に恐れた。基地反対の動きが沖縄から本土にまで広がることを懸念していたのだという。だから、市長を追放した後も、何度申請があってもパスポートを交付せず、沖縄に閉じ込めたのである。

マックエルロイさんは言う。

「それは、アメリカ的ではなく、高圧的で必要のないものだった。沖縄を統治していた人々は、恐れていた。まるで今、イスラム教徒を恐れるように。恐れるなんてクレージーだ。我々の歴史において愚かな1ページだった。とても擁護できるものではない」

アメリカ側の当事者も、合理性を欠いていた、と振り返る。それが占領統治のありようだった。

そんなアメリカも、実は亀次郎がなぜ民衆に圧倒的な支持があったのか、きちんと分析できていた。機密資料がそれを物語る。

亀次郎の那覇市長在任中に国務次官補は、のちに大統領になるジョンソン上院議員に送った書簡で「瀬長はダイナミックで、多彩な個性を持った雄弁家」と評していた。

その11年後の沖縄総領事は大使館の主席公使に対し

「瀬長は庶民性を兼ね備えている。有権者に語りかけるとき、方言を使い、アメリカへの敵意に満ちているものの、とても機知に富み、他の共産主義者の候補のように退屈で陳腐な決まり文句は使わない」と伝えた。

さらに、沖縄から戦後初めて国会議員を送り出すことになる選挙の前、1970年10月には、高等弁務官が

「才能あふれる指導部が人民党の魅力であり続けている」と分析していた。

まさに亀次郎と民衆が一体となっている姿を認め、恐れていたことが浮き彫りになってくる。

アメリカには、都合の悪いことでも、時間が経てば公開し後世に検証できる文化がある。だからこそ、歴史に光を当て、今後を考えるよすがにもできる。

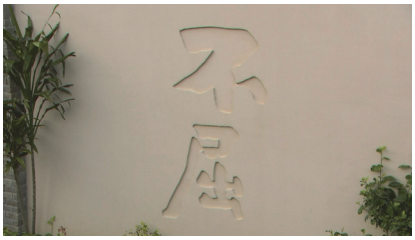
あるのにもかかわらず「捨てた」、「ない」と言ってしまっては、何も学ぶことが出来ない。

すべてを超越した存在

亀次郎の生きざまは、《不屈》と表現される。頼まれると、色紙にも好んでこの言葉を書いたという。では、なぜ、この言葉が好きなのか。次女の千尋さんは、こう言った。

「県民は、亀次郎のことを不屈と言うけれど、父は、県民の闘いが不屈だから、この言葉が好きだ、と言っていた」

お互いに「あなたが《不屈》」と言い合う亀次郎と民衆の姿。そこには信頼関係の厚さが見える。



最近、とかく右・左、保守・革新など、考え方で色分けすることが盛んだが、そんな本土の思想的、政治的な価値観で沖縄を見ると間違ってしまうのではないかと思う。亀次郎も、政治的な歩みをみれば、ある一定のところに分類されるだろう。しかし、おそらくその立場からは想像できない言葉が亀次郎からよく出て来る。「民族」「領土の防衛」などの言葉だ。そして、その「民族」は《日本民族》を指していた。日本人として日本に帰る。亀次郎にとって、ごく自然な目標だった。常に沖縄という大地に立って、民衆のために何をなすべきかを考え続け、実践してきた政治家だった。まさに土着の政治家といっていい。そこに立脚して考えれば、前述の色分けは、もはや意味がない。右も左も保守も革新も、様々な分類を超越した存在。それが瀬長亀次郎なのだ。だからこそ、現代でもなお幅広い支持を集める。それは、当時のアメリカの分析と通底するのではないだろうか。

そして、そんな亀次郎と民衆の関係は、映画の公開日に実証されることになった。

２０１７年８月12日の那覇市の桜坂劇場の前に出来た終わりの見えない大行列を私は決して忘れない。ある人が声をかけてくれた。「知らない者同士が行列を作っているんだけど、カメジローの思い出話で盛り上がって、いまのわじわじーした気持ちを分かち合ったわけよ」

60年前の演説会場はこういう雰囲気だったのではないか、と思った。当時の記憶そのままに、みんなが久しぶりに亀次郎に会いに来ていたのだ。お互いを不屈と言い合った関係は、今も生きている。亀次郎は今も愛され、求められている人物なのだ。

さらにうれしいことに、上映の前にも後にも拍手をいただいた。映画と一体となった客席を包むのは、人々が持つ〝亀次郎体験〟とそれぞれが共有した時代への特別な感情に見えた。「私の人生を振り返るようでした」と、声をかけてくれた女性もいた。その人生は、そのまま戦後沖縄の歩みだった。

沖縄の先行公開から２週間後に上映が始まった東京・渋谷のユーロスペースに広がった光景は、あたかも沖縄を再現したかのようだった。劇場のロビーは身動きできない大混雑。初回から10回連続で満席立ち見をいただく結果となった。それから全国への旅が始まった。

舞台挨拶などで訪れた劇場は40ヶ所に及ぶ（２０１８年２月25日現在）。２０１７年で劇場公開は一旦落ち着いたのだが、ありがたいことに今年に入ってもアンコール上映が続いている。

各地の劇場では、多くのお客様、関係者と出会うことができた。

「亀次郎さんに会えてよかった」「これまで知らなかった。沖縄は同じ闘いがずっと続いてきたんですね」「自分たちの問題として考えたい」

どの劇場もカメジロー愛に包まれた。

歴史を知る意味

どれほど知るべき事実が伝えられないできたか。問題に対して、賛成でも反対でも、まずは前提となる事実を認識し、共有した上で議論がなされるべきではないだろうか。認識から抜け落ちた事実や歴史があっては、およそ全うな議論には至らない。それはそのまま、昨今の沖縄をめぐる議論のありように思えてならない。

テレビの場合、作った先はどのようにごらんいただいているかわからない。でも映画は、劇場に行けば、自分たちの作品をごらんいただいている人々の「顔」がみえる。同じ空間で作品を受け止めた人々から様々な視点が生まれる。私たちも直接触れ合うことで様々な見方を教えられる。これまで味わったことのない感覚を含めて、映画化はテレビからの一つの発展形であることに変わりはないだろう。しかし、ものづくりの観点から考えたとき、ひょっとしたら、その原点に立ち返ったのではない

かとも思う。極力、不要な字幕などは排除し、取材情報と映像で伝え続ける。全国各地で、その感想に触れれば触れるほど、改めて議論の材料や視点を提示することで、ともに考える場とすることを目指すという役割を再確認した思いである。

歴史を見ると今が見える。どのエピソードをとっても、決して昔話ではなく、そこからは〝今〟が見えてくる。占領米軍の弾圧の一つにあった兵糧攻め。現代にも通じる説得の手法である。交付金をめぐる兵糧攻めによって分断された自治体もあるし、いま、今後の対応が問われている場所もある。本作後半に収容した亀次郎と佐藤栄作首相との国会論戦も、いまの政治の、国会のあり方を考えさせられる場面である。

まさに民意を代表して訴える「代議士」としての亀次郎と、それに真摯に自分の言葉で答えようとする首相がぶつかり合う姿は、新鮮ですらある。

（亀次郎）「この沖縄の大地は、再び戦場となることを拒否する！基地となることを拒否する！」

（佐藤）「基地のない沖縄、かように言われてもすぐにはできない。しかし、私どもは平和な豊かな沖縄県づくりに邁進しなければならない」

このやり取りから47年。沖縄の風景は変わっていない。

「沖縄に日本の矛盾が詰まっている」と言った筑紫さんは、こんなことを言っていた。

「独立国になぜ外国の軍隊がいるのか。おかしいよな」

それは亀次郎の疑問と通じる。

「沖縄も占領されているが、この国はアメリカから本当に独立できているのか？」

独立国と外国軍が矛盾とすれば、いまもその多くの部分を沖縄は背負い続けている。不平等な日米地位協定は、その最たるものだろう。改めるべきことの順番も考えたくなる。

戦後70年以上、この国の成り立ちに何の疑問も持たず当然のようにここまですごしてきたようなところはないだろうか。これまでの道のりにいま一度目を向けることは、これからの私たちのありようを考えることにもつながるのではないかと思っている。そんな思いを込めたのが、本作「カメジロー」である。

佐古がこれまで手がけた作品には『生きろ～戦場に残した伝言』、『戦後７０年　千の証言スペシャル　戦場写真が語る沖縄戦・隠された真実』などがある。

２０１６年制作の『報道の魂ＳＰ　米軍が最も恐れた男～あなたはカメジローを知っていますか？～』でギャラクシー賞奨励賞を受賞。

映画化にあたり、瀬長亀次郎の声を俳優の大杉漣さんに依頼。「亀次郎さんの魂が乗り移ったかのような素晴らしいナレーションでした」と急逝した大杉さんを偲ぶ。

「大杉さんと山根基世さんの語り、そしてテーマ音楽の坂本龍一さん。沖縄に思いをもつ方々の力が結集し、作品に重厚さを生みだし、映画を引っ張っていただいた」と感謝の気持ちを述べている。

映画は厚木市のアミューあつぎ映画・ｃｏｍシネマでアンコール上映中、高知市のあたご劇場で14日から、那覇市の桜坂劇場では公開から８ヵ月のロングラン上映中。また、各地映画センター主催の上映会も始まっている。

このほど『アメリカが恐れた不屈の男　瀬長亀次郎の生涯』を出版（講談社）。